

ガンカモ類はどの程度 給餌に依存しているのか？

嶋田 哲郎



ガンカモ類は、冬期、湖沼、河川、海岸など水辺環境に多く生息し、給餌の対象になることの多い鳥類です。給餌によって鳥を身近に見ることができ一方で、過度な給餌は野生の性質を失わせるのではないかなど給餌についてこれまで多くの議論がなされてきました。給餌問題を考えるときに、ガンカモ類がどの程度給餌に依存しているかという科学的データが必要ですが、これまでこうした依存率をもとに給餌問題を考察した例はありませんでした。

そこで、私はエネルギー量を指標とし、給餌量とガンカモ類の代謝量をもとに給餌へのエネルギー依存率を推定してみました。次に給餌を行った年と減らした年においてガンカモ類の個体数を比較することで、給餌縮小によるガンカモ類への影響を評価しました。

調査は宮城県北部の伊豆沼の北岸



嶋田 哲郎
Shimada Tetsuro

に位置するサンクチュアリセンター前の給餌池で行いました。2007/08年の冬に給餌量とガンカモ類の個体数を毎日記録しました。朝の給餌は職員によって行われ、白米、玄米、粳、屑米、餅米、パンが給餌されました。日中の来館者による給餌にはポン菓子を用いられました。ポン菓子とは、古米に圧力をかけて膨らませたものです。それぞれの給餌物の栄養分析を行い、1日あたりに給餌されたエネルギー量を求めました。一方で、ガンカモ類の代謝量は各種の平均体重をもとに、給餌池にいるガンカモ類の1日あたりの代謝量を求めました。給餌池で観察されたガンカモ類は、オオハクチョウ、オナガガモ、キンクロハジロ、ホシハジロの4種で、最も個体数の多かったのはオナガガモで、次いでオオハクチョウでした。給餌による利用可能エネルギー量をガンカモ類の代謝エネルギー量で割ったものを給餌依存率とし、それを月別にみると、11月と3月では代謝エネルギー量と利用可能エネルギー量がほぼ同じでしたが、12月以降依存率は減少し、12月で72%、厳寒期である1~2月では35~40%となり、代謝エネルギー量が利用可能エネルギー量を上回りました。厳寒期にはガンカモ類は給餌だけでは代謝量に見合うだけの食物を得ることができなかつたのです。

翌2008/09年、鳥インフルエンザの影響によって給餌量を減らしました。職員による給餌を止め、来館者の

みの給餌としたのです。その結果、2007/08年では各月平均826kgだった給餌量が2008/09年では42kgとおよそ80%減少しました。ガンカモ類の個体数も給餌量の縮小とともに減少し、前年よりオナガガモで79%、オオハクチョウで74%減少しました。給餌の縮小は個体数だけでなく、彼らの行動パターンも変えました。オナガガモは少数が給餌地でみられる一方で、多くの群れは沼の中央部で日中休息し、夕方採食のために沼外へ移動するようになりました。オオハクチョウも沼内のレンコンや周辺の水田で群れの多くが採食するようになりました。すなわち、給餌の縮小によって、給餌地で少数のガンカモ類を身近に観察できる環境を維持しつつ、給餌地以外の場所での採食を促すことで、群れの分散を図ることができたのです。

給餌によって身近で鳥を観察することは鳥への親しみ、関心を高め、自然保護へのきっかけ作りになります。一方で、鳥フル対策のときに各地で見られたように、急に沼への立ち入り禁止、給餌禁止という対策をとると、鳥は怖いものという意識をいっせいに広げてしまうこととなります。伊豆沼では、科学的なデータにもとづいて給餌縮小という対策をとりました。その結果、鳥を身近で観察することができる環境を維持しつつ、鳥を分散させることができました。地道に科学的データを積み上げていけば、解決策を必ず見いだせます。

(公財)宮城県伊豆沼・内沼環境保全財団上席主任研究員。学生時代からガンカモ類を中心とした水鳥類の研究を行い、現在、コクガンの衛星追跡調査に取り組んでいる。また、水鳥類の研究ほか、伊豆沼・内沼の自然再生、ブラックバスなどの外来魚駆除や環境教育などに取り組んでいる。